

## 平成 28 年度 卒業式 式辞

本日ここに、長野県議会議員 村上淳様、南木曾町町長 向井裕明様をはじめとする卒業生ゆかりのご来賓の皆様、並びに多くの保護者の皆様のご臨席を賜り、長野県蘇南高等学校第六十二回卒業証書授与式を挙行できますことは、私ども教職員一同にとってこの上ない慶びであります。ここに篤く御礼申し上げます。

卒業生の皆さん。卒業おめでとう。

君たちは、私が初めて蘇南高校の校長となり、共に感動的な2年間を過ごしてきた者として、特別な気持ちを持って、君たちの成長と活躍を見続けてきました。

今、私に向けられている君たちの邪気のないまっすぐな視線に、これからの人生に立ち向かう覚悟と強い意志とを感じています。

3年前、君たちの入学に際し、前横野校長先生は

皆さんに3つお願いしたいことがあります。

1つ目は「初心忘るべからず」。本校を志した気持ち、今現在の感動を卒業まで大切に持ち続けてほしいという事です。

2点目は、これから3年間、頭と体をとことん鍛えてほしいということです。どんな困難に直面してもそれを乗り越えていく力の基本は、なんといっても学力と体力です。

3 番目は心を鍛えることです。

感謝の心、耐える心、特に磨いてほしいのは、

相手を思いやる心です。

人は一人では生きられません。クラスで、授業で、部活動で、いろいろな人間関係が存在する中で、お互いの人格を尊重し、人が悩んでいたら思いやり、困っていたら助けるという人間として当たり前の心と、時には勇気をぜひ身につけてください。

と語っています。君たちはこの言葉通りの高校生活を過ごし、この3つの願いを身につけたのではないのでしょうか。

そして「これからの蘇南高校のあるべき姿」を具現するために、昨年の卒業生の足跡や2人の担任の先生を始めとする蘇南高校の先生方そして仲間たちや後輩たちから多くを学び、さらに素晴らしい学校となるように努力してくれました。

学校生活、授業姿勢、生徒会行事、学校行事等で、昨年の卒業生以上の実績と内容の充実、威厳と存在感と充実、そして感動を私たちに残してくれました。

残る我々は2年生、1年生、そしてやがて入学してくる新入生と共に君たちが残してくれたものを土台として、さらに「生徒や先生が輝く蘇南高校の充実発展」に努力してゆきたいと思います。

さて、6年前に起きた東日本大震災と福島原発事故、昨年の熊本大震災により、科学技術立国として繁栄した「富める国日本」という幻想は連続した大震災により完全に打ち砕かれました。そして、人と地球、科学文明と自然、人が大自然の一員として

生きていることを否応なく気づかされました。同時に、君たちは、好むと好まざるとに関わらず、日本再建を担う中心世代として確実に運命付けられてしまったわけです。

これからは、常に社会を考え、自分自身で総合的な判断ができ、行動するという「生き抜く力」の知性と知恵を身につけなくてはなりません。その上に、他人のために祈り、涙する、温かい心もはぐくまねばなりません。

そのために「ひたすら学び」、身に付けた学びを如何に社会に還元するかを常に考えていかねばならないのです。

そして蘇南高校でひたすら学び、今日、君たちは立派に成長しいよいよ社会に羽ばたくときが来ました。

これからの社会への責任を担う決意をすることが、今、卒業の春を迎えることだと思います。

これまで様々な人たちに見守られ愛されてきたことに感謝してください。そして、今日からは、「愛される存在」から「愛する存在」に変わってください。人を愛することこそ、君たちのこれから始まる青春の旅の指針なのです。

君たちに今求められているもの、それは、他人を蹴落とす冷たい個人主義や即物的な経済至上主義ではなく、思いやりある人間らしい、温かい心と心の繋がりで社会を支えていく力なのです。

求めるべきは富ではない。富よりも、名誉よりも、大切なのは人を愛することです。器用に生きる必要はありません。愚直でもいい、真っ正直に生きて、身につけた学びを、如何に社会に還元できるかを考えてください。

そして命についてもお話しします。

私たちは、命を自分一人のものと考えがちです。かけがえのない命は、もちろん自分だけのもの。他の人と取り換えようのないものです。

命は、自分一人のものですが、一人で支えているものではありません。他者の存在なしに、命はありません。家族と自分、友人と自分、他者と自己、それぞれがその命を自分の中に大切に抱えながら、もうひとつの命に支えられ生きているのです。

自分にかかけがえのない命は、相手にとってもかけがえのない命だということ、つまり、自分とかかわりのある相手の心に近づき、自分の身を相手に重ねるという命の尊厳を認め合うということを改めて考えてほしいと思います。

そして、「時を考えて」ください。辛いことがあっても、人に支えられながら我慢して「生きて」ください。「時」はつらいことや悩みを「とっても素敵な宝物」へと熟成させて、数年後の君たちの心を温かくしてくれるはずです。

最後に卒業生への贈り物として、『古今和歌集』詠み人知らずの和歌を紹介します。

「紫の一本（ひともと）故に武蔵野の

草は皆がらあはれとぞ見る」

禁色と言われる紫色の服は天皇を始めとする高貴な方しか着ることが出来ない色です。平安時代その紫色を出せるの紫草だけでした。辺境の地であった武蔵の国の武蔵野において、紫草が一本が咲いているのを見ると、そこに生える全ての草木が愛おしく思えるといった意味です。

君たちも「紫草」のように「この人がいるからここは素晴らしい」と言われる人となってください。大いに期待しております。

この南木曽の地は、まもなく桜や岩つつじが咲き、命の躍動する新たな季節を迎えます。

皆さんは、互いに命の尊さを思いやり、冬の後には桜や岩つつじが咲き誇る季節が必ずめぐってくるという自然の強さに思いをはせ、力強くこの学舎から巣立って行ってください。

皆さんの洋々たる前途に幸多からんことを祈念し、式辞といたします。

平成二十九年三月四日

長野県蘇南高等学校 第二十一代校長 杉村 修一